

グラフ北方圏 GRAPH HOPPOKEN

北方圏の暮らしと住まい



Northern Regions Center

社団法人 北方圏センター



ひとまわり大きく便利にヨーロッパへ。

4月26日より北極ルート毎週3便に!!

4月26日の成田発より、SASの北極ルートは日曜発の便を加え、毎週3便となります。しかも全便DC-10ワイドボディで運航。北極ルートを開拓したパイオニア・SASが、このヨーロッパへのメインルートにさらに便利な、ゆとりあるものにしました。夏期スケジュールがスタートする4月1日から4月19日までの日曜成田発の便は、現行の冬期スケジュール同様、シベリアルートで運航します。コペンハーゲンからは、ヨーロッパの60数都市に接続。

この北極ルート開設24年を迎える実績と、スカンジナビアン・ホスピタリティーにみちたサービスで、ヨーロッパへの空を飛ぶSK980便をご利用ください。

SAS北極ルート (1981年4月25日 - 9月26日)		
水・金・日 SK980	DC-10 ワイドボディ	水・金・日 SK989
21:30	東京(成田)	15:30
10:00 11:00	アンカレッジ	14:05 12:55
木・土・月 06:30	コペンハーゲン	火・木・土 15:20

Subject to Government Approval 出発時刻は変更されることもあります。お確かめください。

スカンジナビア航空 千100 東京都千代田区有楽町1-5-2 東宝ツインタワービル
東京503-8181・8101(予約) 大阪202-4753-5161(予約) 名古屋561-6913 横浜671-7207 神戸321-1175 札幌241-6050 福岡713-7581

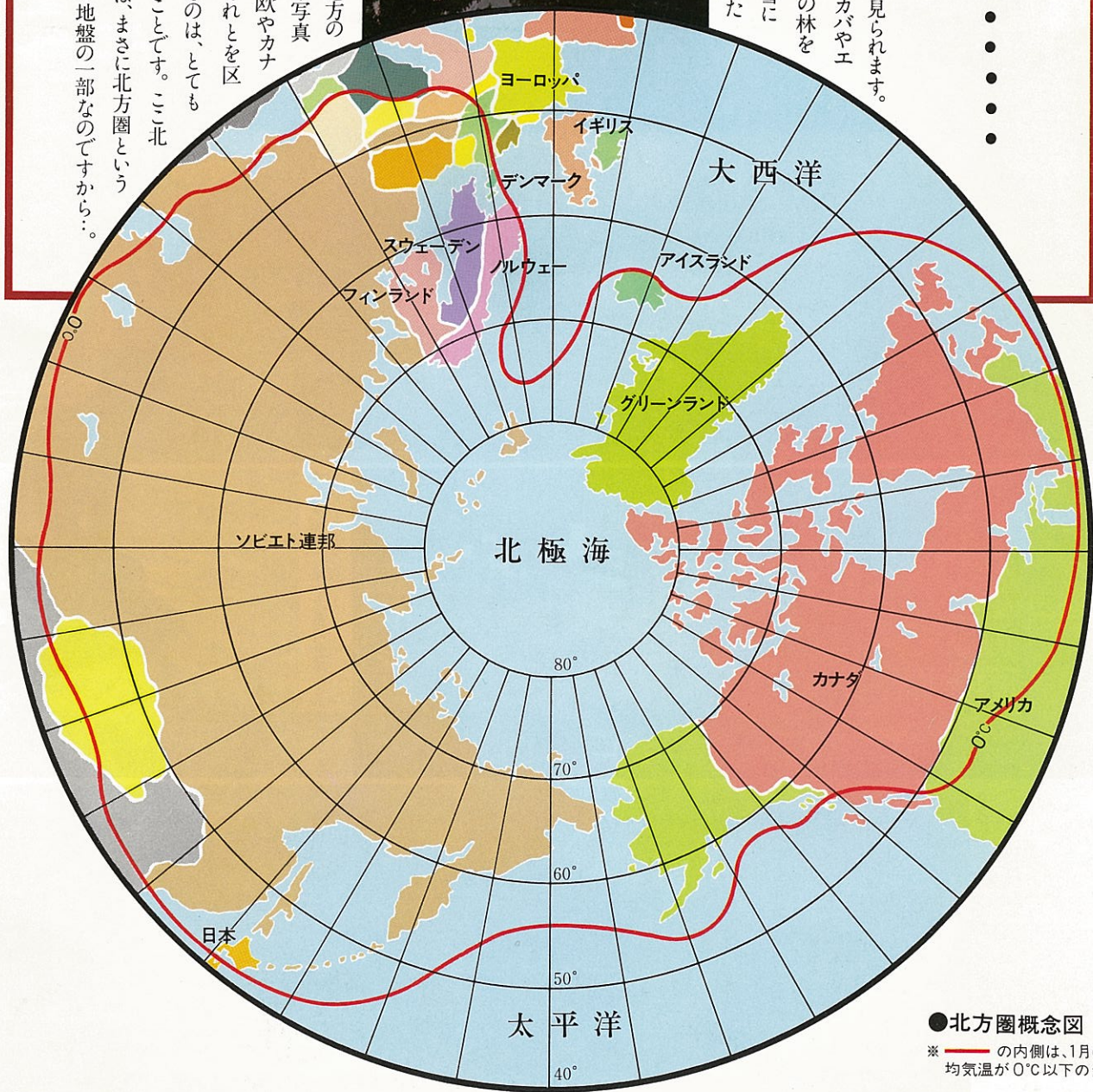


北方圏とは……

「北方圏」という言葉には、まだ定義がありませんが、だいたい、北海道と気候、風土が似た地域を指しています。例えば、北海道、カナダ、アラスカなどアメリカ北部、ソ連邦シベリア地域、中国東北地方、それにノルディック諸国などがあてはまります。

私たちが住む北海道は、同緯度の他地域よりは、はるかに冬が厳しく、流水が訪れる南限でもあり、他地域には見られない多雪地帯になっています。気候が生態系や生活を規制するためこれらの地域では、植物、動物、さらに人々の生活にも自ら共通するものが多いのは当然。例えば、植物では、寒帯針葉樹林、シラカバ、コルデア系とよばれる一群の仲間、動物では、クマ、テン、アザラシ、ハクチョウ、魚ではタラ、サケ、マス

根釧地方の農家の写真と、北欧やカナダのそれとを区別するのは、とても難しいことです。ここ北海道は、まさに北方圏という共通の地盤の一部なのですから……



●北方圏概念図
※ — の内側は、1月の平均気温が0℃以下の地域

1月の気温がマイナス5℃以下
4カ月以上雪が降る国



▲地下に埋め込んだエスキモーの家(アメリカ)

▲オスロ市のシンボル市庁舎(ルウェー)

▼氷の中の人魚の像(デンマーク)



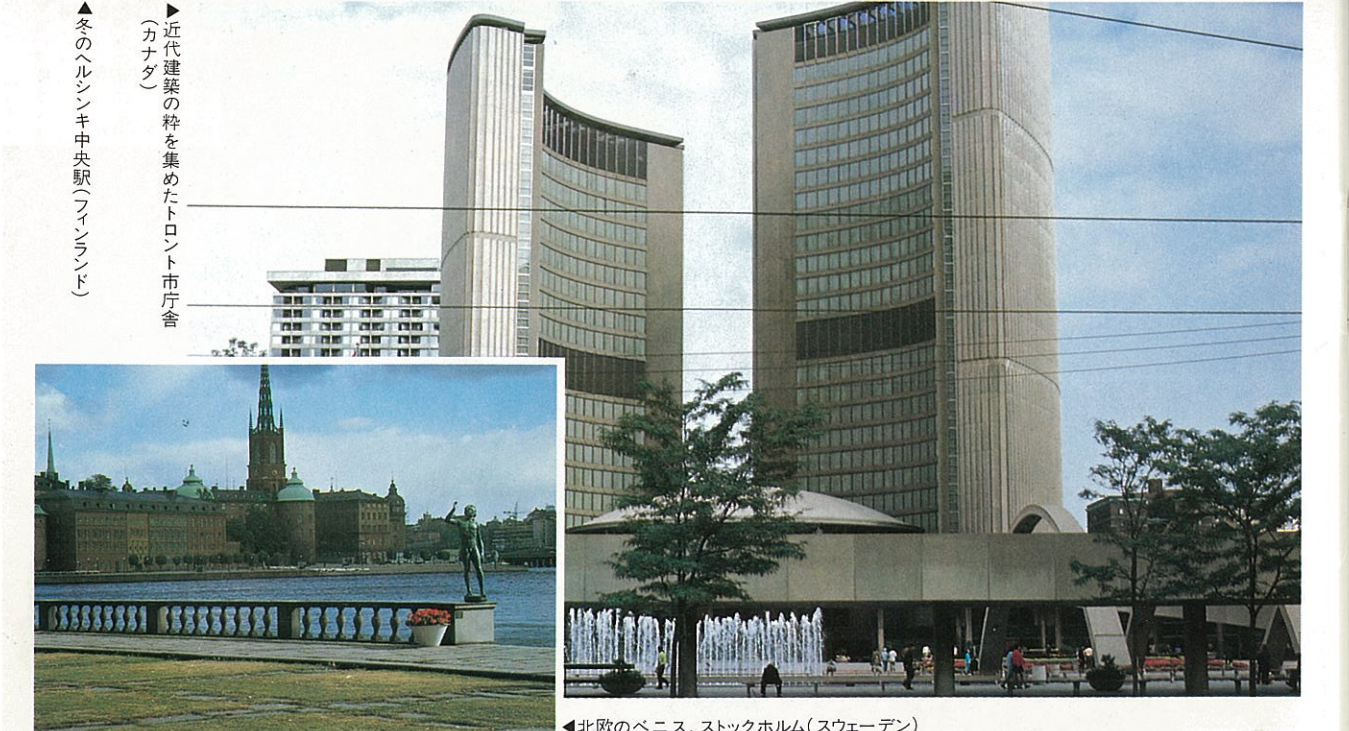
▲北緯66上に浮かぶ島の主都レイキャビック(アイスランド)



▶タイガをぬって走るトラック(ソ連)



◀北欧のベニス、ストックホルム(スウェーデン)



▶近代建築の粋を集めたトロント市庁舎(カナダ)

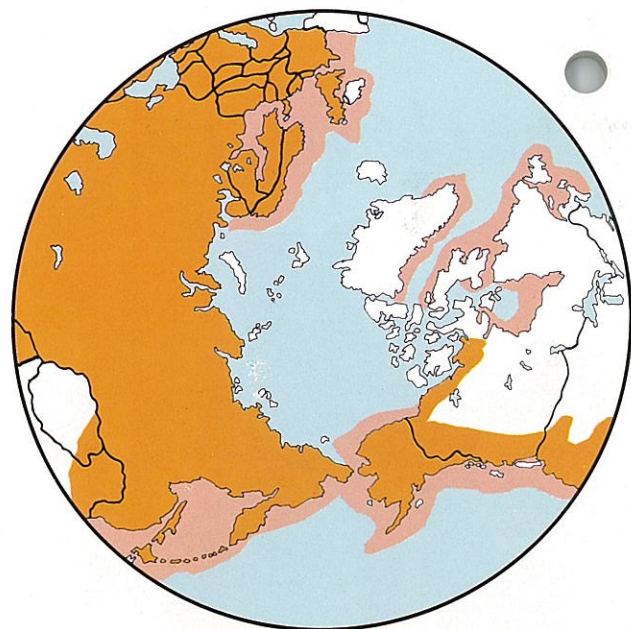
▲冬のヘルシンキ中央駅(フィンランド)





植物分布図

針葉樹林 水 圏
ツンドラ



動物分布図

ゴマアザラン ヒグマ



白樺と針葉樹、鳥たち、獣たち

▲ビッグホーン(カナダ)



▲太平洋岸にしかないトド(アメリカ)



▲地リス(カナダ)

▼トナカイ(フィンランド)



▼凍った港で羽根を休める水鳥たち(フィンランド)



▲タピオラ田園都市のシラカバ林(フィンランド)

◀白い造型美、樹氷(ノルウェー)

▼家の垣根によく見られるハマナスの実(スウェーデン)



どんな街づくりを しているのだろうか

積雪寒冷という冬の中で、北方圏の街はあります。都市生活には、電気、上下水道、暖房、道路とその除雪など、不可欠な機能がいろいろと要求されますが、北の街には、特に条件が多く複雑です。これらの一つ一つを解決して、都市の市民生活が成り立ちます。私たちの買物公園などは、夏向きの計画がほとんどで、冬は、むしろ除雪の障害になって雪にうずもれているところが多く見うけられます。都市の環境は、四季を通じての配慮があつてこそ、そこに住む市民のものとなります。緑と白の自然を背景に、美しい街が共存するのが、理想と考えるべきで、冬の先進国ではそれが常識となっています。

ならないようにとの配慮からです。地域の集中暖房もその一例です。共同で寒さに対応する手段の具体化です。それにはまた、空気のきれいな、煙のない町にする効用も含まれています。

都市に住む人たちが、冬の自然の過酷さとうらはらに豊かな環境に生活することができるのは、自然に対処する人間の英知の積み重ねからといえましょう。四季の変化の中で、自然に調和した美しい街が北の国に多いのはそのためです。



北方圏の街々は、バスや電車の停車所の標識が、電柱などのポールについているのを多く見かけます。たかがバスの標識と思いが、道路の除雪の邪魔に



雪と共存している町や村



▲除雪を考えて、道幅を広くとった村(デンマーク)



▶冬の合理的な生活を考えて、集合住宅が多い(フィンランド)
▲都市集中暖房が完備してどの家も暖かい(ノルウェー)



▶広大な耕地に囲まれた農家(ノルウェー)



▶自然と伝統とのみことな調和(フィンランド)



▲モール(歩行者天国)もきれいに除雪(デンマーク)



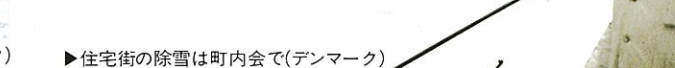
▲スリップ防止の砂をまいた道路(ノルウェー) ▲きちんと除雪された車道、自転車道、歩道(デンマーク)



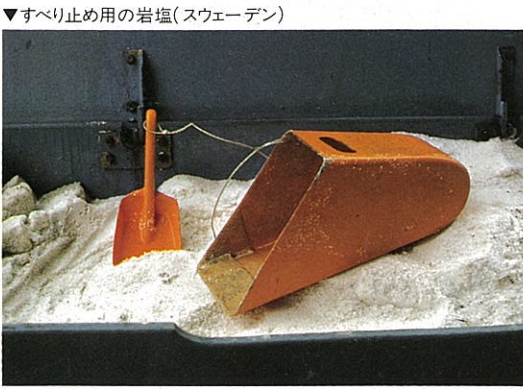
▲農家の小型トラクターも総動員(デンマーク)



▲除雪のためのアイデアがいっぱい(ノルウェー)



▶住宅街の除雪は町内会で(デンマーク)



▼すべり止め用の岩塩(スウェーデン)



▼(デンマーク)融雪促進に使う塩化ナトリウムや砂(フィンランド)▼



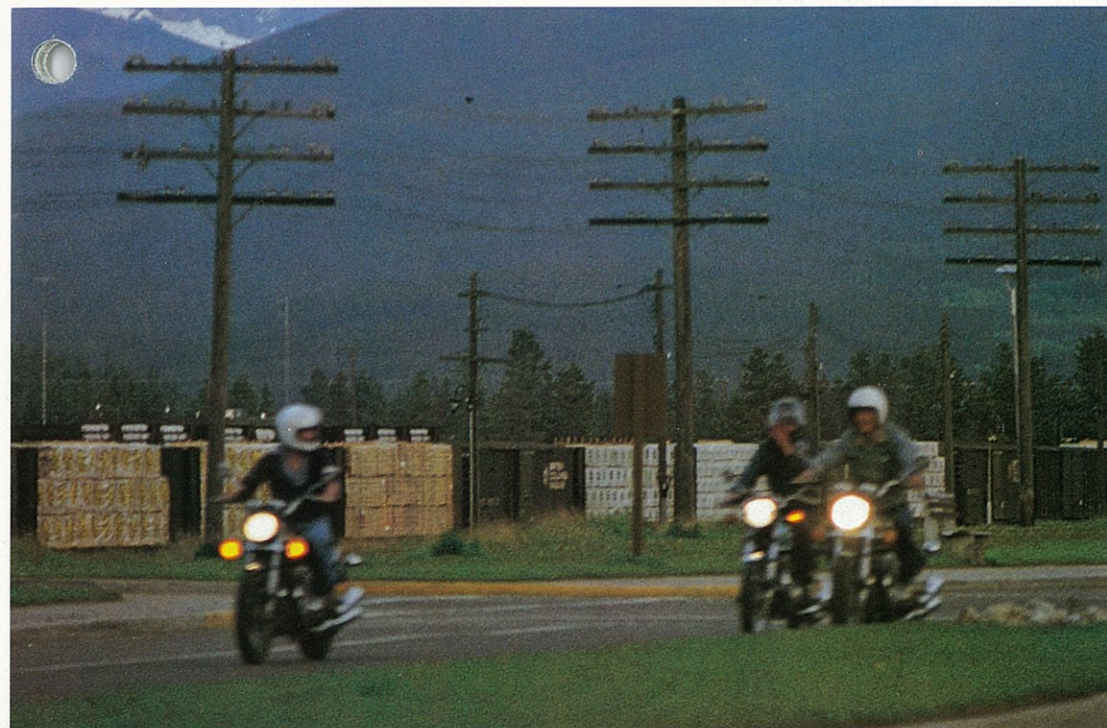
▼除雪をするためのきめ細かな道具(フィンランド)





▲除雪のじゃまにならぬよう、電柱を利用した交通標識(ノルウェー)

▼積雪を考慮、高めにつけた交通標識(カナダ)



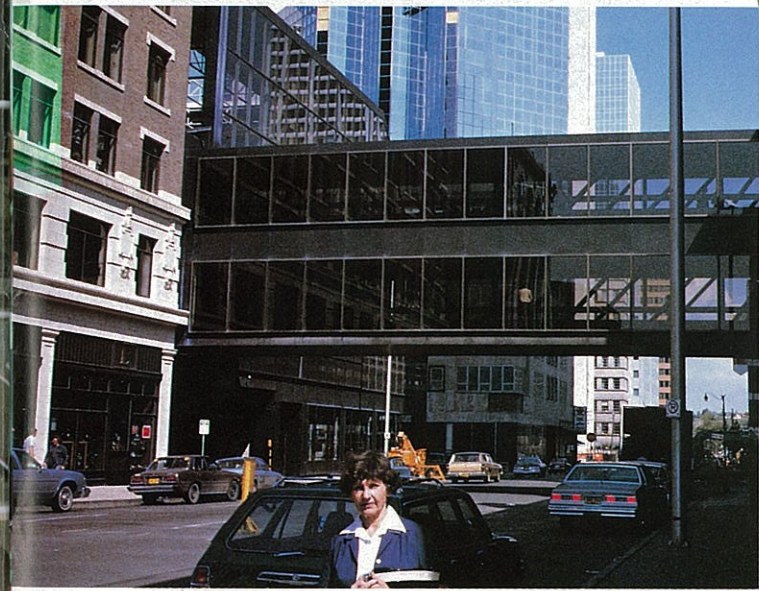
事故を防ぐため、年中昼間もライトをつけることが義務づけられている(カナダ)
▼(フィンランド)

昼間でもライトをつけて走る車





▲暖かいヤクーツの百貨店(ソ連)



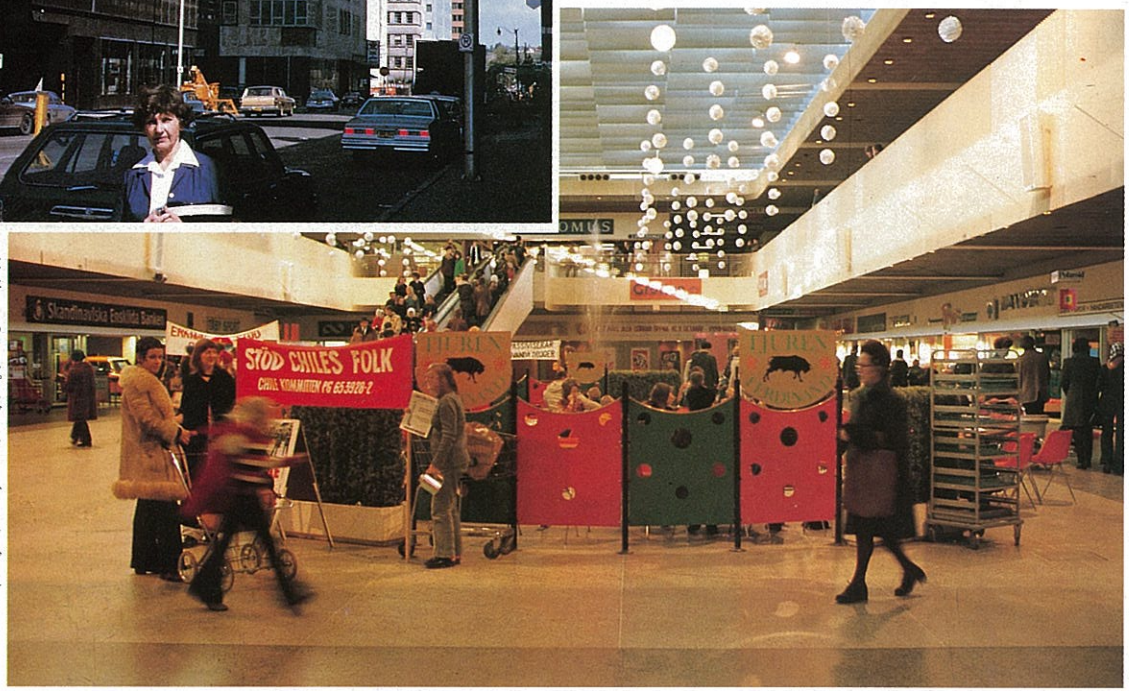
▲屋根のある街、トロントのイトンセンター(カナダ)

▲スカイウォークでビルからビル(カナダ)

▶屋根つきのショッピングセンター(スウェーデン)



▲落雪注意(ノルウェー)



商店街も冬の備えが万全だ

集合住宅も自然との調和を大切にしている



▲採光を考慮して設計した円形アパート(スウェーデン)

◀傾斜地を利用した緑の中の集合住宅群(ノルウェー)

▼雪の白さにマッチした外観(フィンランド)



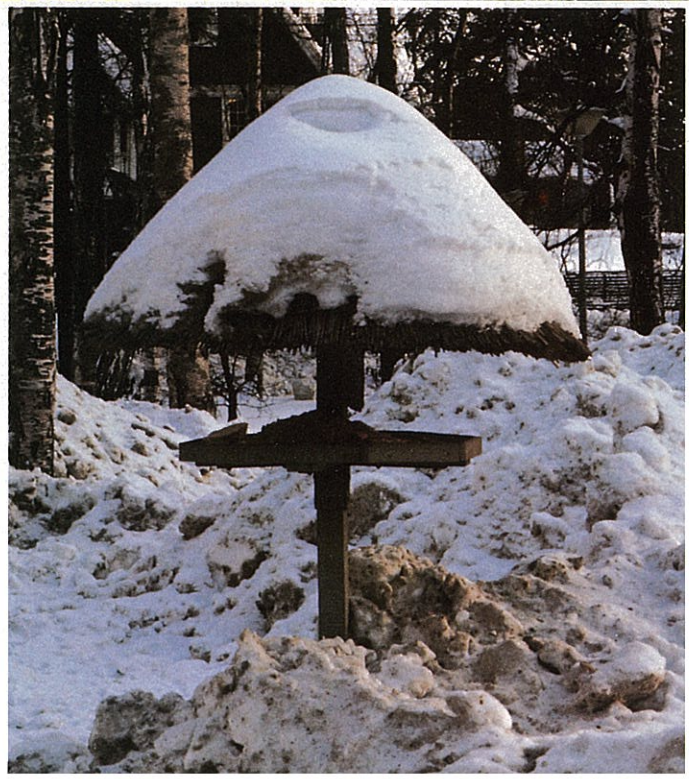
◀森と湖の中に出現したタビオラ田園都市(フィンランド)



▶街路樹にマッチした古いアパート(カナダ)



▲おなかをすかせている小鳥へ、パンのプレゼント(スウェーデン)



▶小鳥のエサをのせるバードテーブル(カナダ)



どんな人たちが 住んでいるのだろうか

広い北方圏の地域には、さまざまな民族の人たちが住んでいます。西も東も入れている範囲には、地球上の十分の一の人が住んでいます。皮膚の色も違い、言語も異なる人たちが、積雪寒冷の地に居住していることが、最大の共通点と考えていましょう。

その共通点が、その人々を結びつける大切な絆なのです。冬の過酷な自然条件の中での、それなりの自然との闘いと順応が、生活の歴史と哲学となっており、今日の生活に続いています。

北国に住む者同士との心は、親愛感から生まれるものでしょう。

北欧に人間が定着したのは、約八百年前とも言われています。その年輪は、そのまま冬の生活の歴史と考えてもいでしょう。その年月の上に、北欧の生きた文化が創りあげられました。

あげました。北方圏に住む人たちの連帯は、北の衣食住を中心にますます強まり、交流の広がりとともに力強い友情に育っていくことでしょう。



冬の街角を歩いてみる



▲温室とお店が一緒になった車の花屋さん(ノルウェー)



▲白い雪が、古い街並みにファンタジックな詩情を添えている(デンマーク)

▲新しい防寒着がウィンドーをかざると、冬はそこまで(フィンランド)





▲パリやローマのおしゃれでは、寒さに追いつけない(デンマーク)



▲寒さに対する心がまえも個性的(フィンランド)

▼帽子はご婦人の欠かせぬおしゃれ(フィンランド)

男も女も寒さへの備えは十分だ





▲晩秋の朝市。最初のお客さんは小鳥たち(フィンランド)

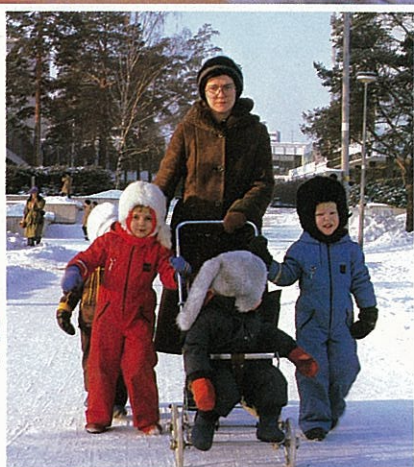


▼どんなに寒くても必ず開かれる朝市(フィンランド)



小さな赤ん坊づれで
出歩く、婦人たち

◀散歩は真冬でも欠かさない(フィンランド)



▲冬も乳母車を気軽に押し歩く(フィンランド)

▼1日に1回は、赤ちゃんを外にだすのがお母さんの日課(スウェーデン)



▶ボートがお店に早がわり(フィンランド)



◀伝統的な生活用具もたくさん並ぶ(フィンランド)

どんな住まいに暮らしているのだろうか

極寒の半年にわたる冬、荒れ狂う吹雪の日々にあつて、北国の人たちが心のやすらぎをおぼえる場所は、住まいそのものです。家族が一つの火を囲みながら春を待つのは、今も昔も変わりません。

北方圏の地域に住む人々は、きびしい風雪の中にあつて、ひたむきな努力で水準の高い独特の生活・文化を創りあげました。

例えば、地熱の暖かさを利用した地下室を作り、その機能を生活の中に定着させました。昔からの生活の知恵が今に伝わり、ほとんどの人たちがそれを有効に活用して暮らしています。

外気の冷たさや、風に対する対処も、窓の一枚一枚にあらわれています。

二重窓から三重窓と、自然の猛威に對抗する知恵が、

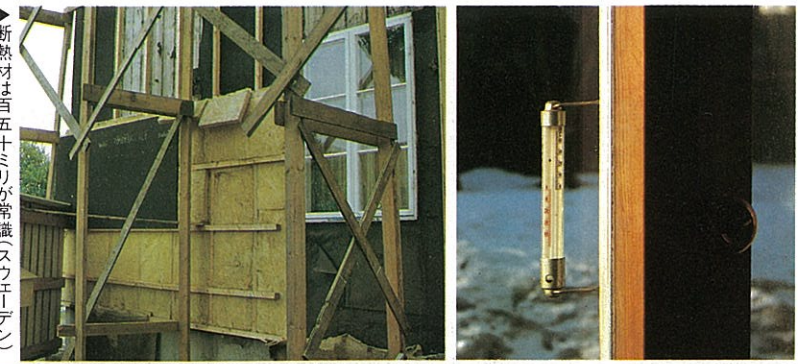
より完璧な技術を開発して冬の生活を暖かく包んでいます。また外部に熱の逃げない工夫や暖かい空間への配慮も、それは、すべて、自然と人間との関わりから生まれたものです。

冬はつらいもの、から、むしろ、暖かく快適なもの、へと変わりつつあります。その役割を果たしてくれるのが住まいであり、その中での暮らし方の工夫です。照明器具、動物、家具の選び方一つにも、そうした意識が大切です。寒い国から生産されるものの一つ一つのデザインが、それを象徴しています。



地下室の利用も北の住まいの工夫

▶寒さに備えて三重窓があたりまえ(ノルウェー)
 ▲外の温度を見ることから一日が始まる(スウェーデン)



▶断熱材は百五十ミリが常識(スウェーデン)



▲ほとんどの家が半地下室を持つ(ノルウェー)

どの家も温度を知ること たいへん敏感だ

▶半開きの窓も、恐らくほとんど木製(フィンランド)
 ▲窓の外には寒暖計が必ずついている(スウェーデン)



▲地熱暖房を利用した地下の乾燥室(アイスランド)



▲採光を考えた半地下室はもう一つの生活空間(カナダ)

▶半地下室は貯蔵庫や遊戯室にも利用されている(カナダ)





▲窓ぎわの花に、道行く人の心もなごむ(カナダ)



▼緑とローソクの炎は、暗い冬の心のふれあいの小道具(スウェーデン)

冬の住まいに緑は欠かせない

▼観葉植物の種類はじつに多い(カナダ)



▲緑とローソクを囲んでパーティーが始まる(スウェーデン)



▶花やテーブルクロスで明るい食卓(スウェーデン)

素材は木、あかりは白熱灯



▲シェードのデザインもバラエティー(スウェーデン)

▲白木の家具と白熱灯が暖かいふん囲気をつくる(フィンランド)

▼白木の暖かさを生かすすぐれたデザイン感覚(ノルウェー)



◀木膚のぬくもりが伝わるサウナの
休けい室(フィンランド)



▲アパートの物置(上)や地下の冷
凍室(右)にも、大きな白熱灯が
(フィンランド)



◀丸太組みは北国の住まいの原型(カナダ)

北の台所は清潔で行き届いている

◀明るい色でまとめた機能的なキッチン (スウェーデン)



▲大きな収納棚できちんとかたづいた台所(アメリカ)



◀お湯は地熱を利用。ふんだんに使える(アイスランド)



▶居間や寝室はもちろん台所にもフレートヒーター(電気)がついている(ノルウェー)



▲(スウェーデン) 台所の熱源は酸欠防止のため電気が主役 ▶(ノルウェー)



どんな服を着て 過ごしているのだろうか

カナダでも北欧でも、冬の凍るような寒さの日に外を歩いている人の数は、暖かい日とあまり変わりません。耐寒のための帽子、手ぶくろ、コート、くつなどで、ピリピリする氷点下の中を元気に買い物や散歩をしています。

その土地で着るものは、その土地の自然に順応するための知恵から生まれるものです。なかには、粗野で武骨な感じのするものもありますが、それが、むしろ寒さに対抗するための機能を持ち、ファッショナブルな感じを与えます。

糸一本、縫い目一針にも、その土地の厳しい自然の中の工夫と配慮がにじんでいるからです。

許されません。白い雪や氷の上で元気に動き回る子どもたちは、万全な防寒着に包まれています。

寒さを防ぐための工夫と、その素材の種類の豊富さは、北国の服装の特徴です。

どこの国の親たちも、子どもはできかぎり野外に出して遊ばせるようにしています。ですから、防寒着は命を包む重要な目的を持つことになり、スタイルや色彩だけにとらわれることは

毛皮か

ら化学繊維と

多様ですがそれぞれの特質を生かした耐寒への工夫と知恵が独特のファッショ

ンを作って、冬を楽しく過ごしています。



素材は毛皮、そしてキルティングの服

▲ 久しぶりの日差しをあげる子どもたち(アメリカ)

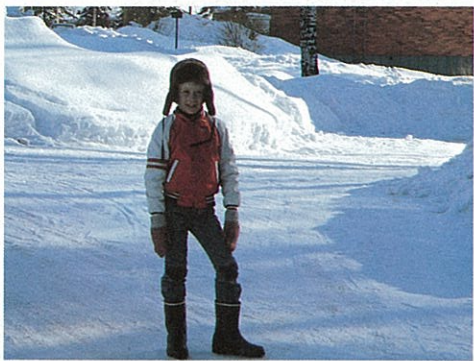
◀ 足元まで包み込むキルティングコート (フィンランド)



▲ ちょっとした外出でも、帽子とコートをはなさない (フィンランド)



▶ ラップ民族の衣裳をつけた親子(フィンランド)



▶ 遊び盛りの子どもの服は機能的 (フィンランド)



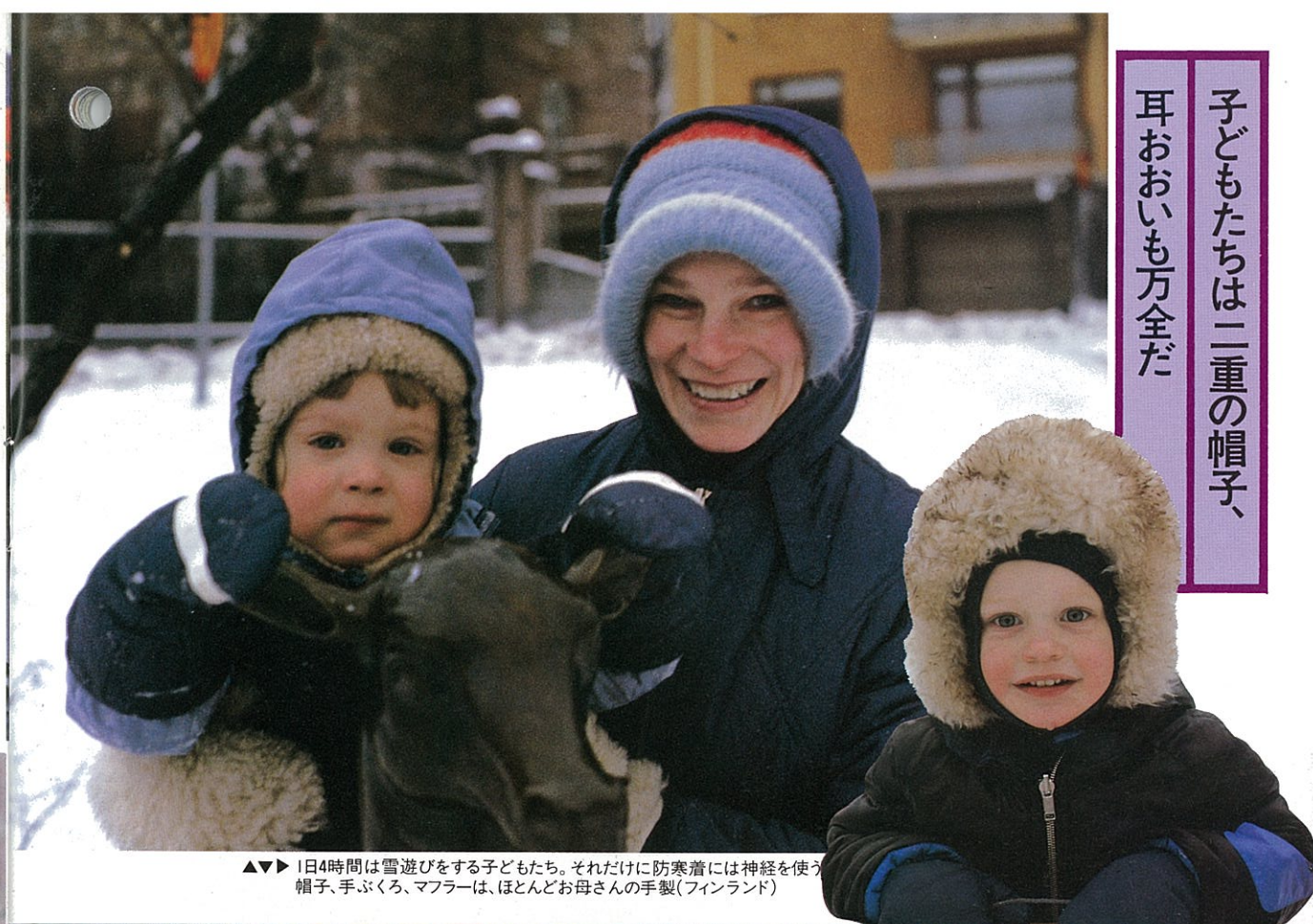
▲ 極地の人々にとって、毛皮は必需品(アメリカ)



▲ショッピングは必ず子供づれで(デンマーク)

▼いてつく街角におしゃべりの花が咲く(フィンランド)

寒い物にも、婦人たちもイキイキと動き回る



子どもたちは二重の帽子、
耳おおいも万全だ

▲▼1日4時間は雪遊びをする子どもたち。それだけに防寒着には神経を使う
帽子、手ぶくろ、マフラーは、ほとんどお母さんの手製(フィンランド)



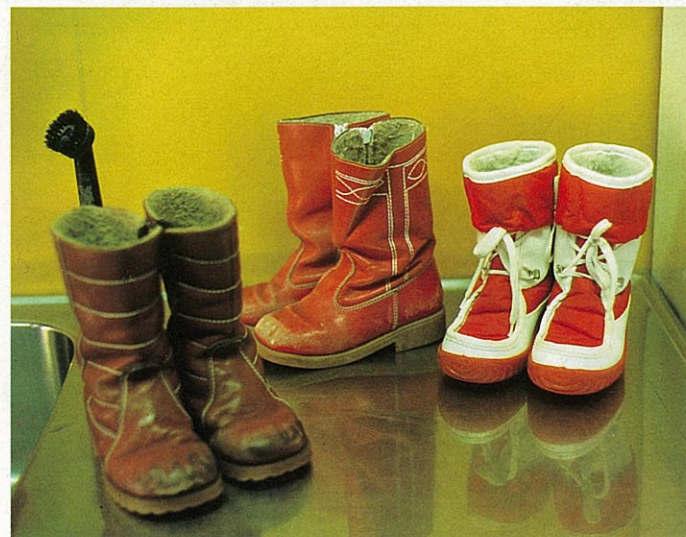


▲ 手ぶくろの内側には、暖かな素材が加工されている(フィンランド)



▲ 防寒性を最優先に製品化されているが、デザインも楽しい(ノルウェー)

▼ 保育所や幼稚園には、くつの乾燥だながある(フィンランド)



保温だけでなく、雪が入らないようにする工夫などがほどこされているくつ(カナダ・スウェーデン・フィンランド) ▲▲▲



どんなものも食べて 生活して いるのだらう

華麗な料理に比べ、なんとなく野暮
つたい感じのするのが、北の地方の料理
です。しかし、味わってみると、その土
地の新鮮な材料や気取りのない調理法
で、北の味の特徴をよくだしています。
北の海には魚の宝庫が多く、それだ
けに、料理は、伝統的に種類も多様で
す。サケ、マス、ニシン、カレイ、エビ、タ
ラと、北海道とあまり変わりません。
特に、タラは冬の栄養源として欠かせ
ません。

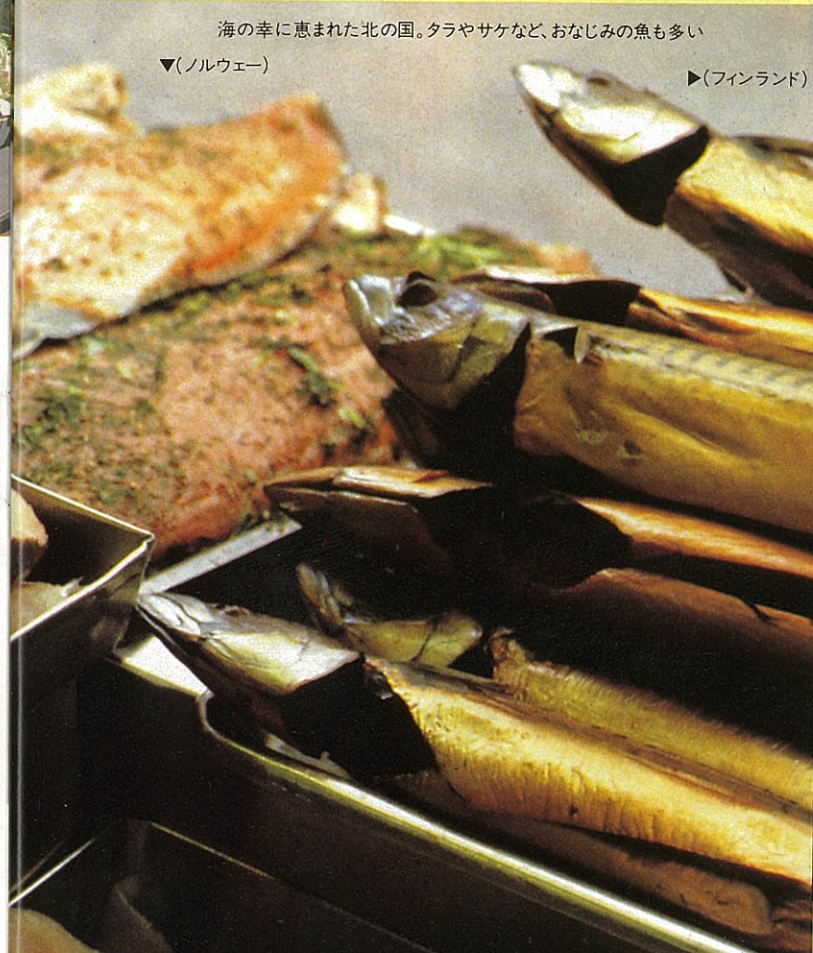
少ない
日々に、
味の中から
カロリーを求めた北の人たちの工夫の
産物です。

新鮮な魚を保存食として加工するの
も、冬の栄養のための知恵です。魚の
酢づけや燻製の技術が、一般の家庭の
調理にとり入れられており、食物が不
足する冬の生活で、いかにして栄養のバ
ランスをとるかという努力から生まれた
ものが、北の味覚の代表になっています。
乳製品の種類の多いのも、保存食の
知恵から生まれたものです。バター、チ
ーズ、ヨーグルトなども、太陽の恵みの

栄養たっぷりのジャガイモの料理が多
いのも特色です。冬にも保存のきく、ジ
ヤガイモは、北の味の王様です。
短い夏の間には育つ野菜や果物は、大
切に使います。あまり加工しないで、
出来る限りそのまま食べるのも、新鮮
さの恵みをだいにしているからです。



ジャガイモは北国の主食。冬も野菜は豊富に並ぶ ▲▲▲(フィンランド)



海の幸に恵まれた北の国。タラやサケなど、おなじみの魚も多い
▼(ノルウェー) ▲(フィンランド)



市場には、魚、野菜、肉があふれている



▲エビも北国の人々の好物(アメリカ)



▶ハムやソーセージは、種類が多い(スウェーデン)

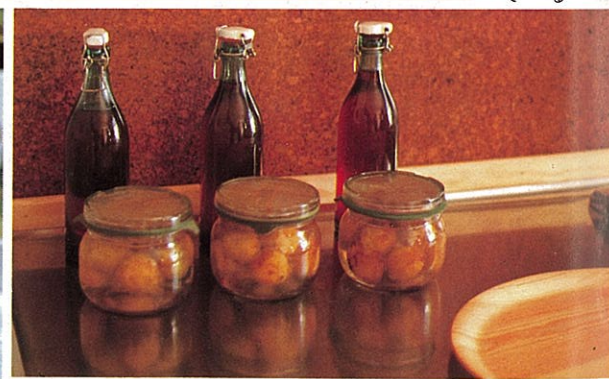


保存食品も北の食卓には欠かせない

▼北の家でも果実酒をつくる
(フィンランド)
▲干草ラ国内では食べきれず輸出して
いる(アイスランド)



野菜の栽培にも熱心だ



▲乳製品は冬のりきるカロリー源
(フィンランド)
▲保存食づくりの伝統が生んだ果実酒
(フィンランド)



▲地熱を利用した温室。日光の弱さをおぎなっている(アイスランド)

食卓も魚料理、肉料理など多彩だ

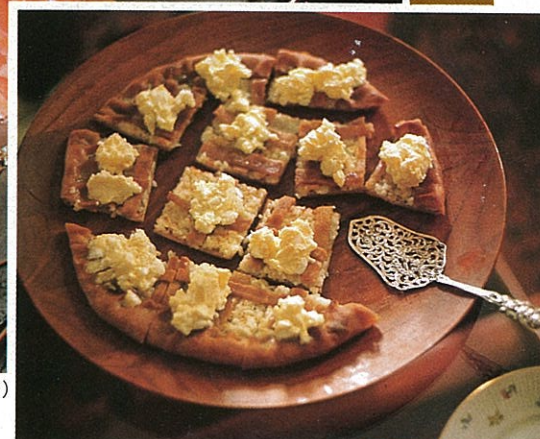


▲魚の保存食は、北国の知恵(ノルウェー) ▲



▲北のテーブルは、魚料理が主役(フィンランド)

▶ミルクたっぷりのケーキ(フィンランド)



▲体を暖めるチーズ料理(デンマーク)

◀お客さまへの最高のもてなし、バイキング料理(スウェーデン)

▶肉と野菜のバランスを大切に(デンマーク)



◀北極圏のこちぞう、トナカイの肉(フィンランド)

子供たちは どんな環境に いるのだろうか

北方圏の街角では、寒い日にも乳母車をたくさん見ます。幼ない時から積極的に外気に触れさせて丈夫な子どもに育てる、という考え方は、寒い地方に共通しているようです。

子どもたちは、冬の自然の中でのびのびと活発に遊んでいます。これには親が冬をよく理解していなければなりません。

子供を冬と結びつけた環境づくりにもどこも一生懸命です。公園や遊園地に木製遊具が目立つのもそのあらわれです。金属ですと、冷たいとき手の皮膚に危険です。それと、木は、暖かみがあるものの気持ちを安心させます。

北欧では、マイナス十度まで、野外で保育所が開かれています。小学校でも冬の休み時間には必ず校庭に児童を出すようにしています。冬は寒いのが当たり前



り前で、冬も新鮮な空気を、という考え方が常識になってきているようです。その四季の自然の中に順応させていく方法が教育の柱になっているのです。夏は緑に親しみ、冬は寒さと雪の自然に親しめる北国は、理想的といえます。

子どもたちは、冬でも戸外で元気だ



▲真冬も開かれる野外保育所(フィンランド)

赤ん坊もマイ10℃までは戸外で外気浴



▲生後3週間たつと、30分以上外につれ出して新鮮な空気に触れさせる(フィンランド)



▲学校の方針で、休み時間は校庭へ(フィンランド)



遊園地は、木づくりの遊具が多い

遊具はほとんどが木製。鉄は素膚が触れると寒さでくっつく



▲(フィンランド)



▶(カナダ)

▼(フィンランド)



▲(ノルウェー)

▼(ノルウェー)



▶(フィンランド)

▲(フィンランド)

寒さを忘れてしまいそうなカラフルな遊具が目立つ

子どもたちの活発さは、夏も冬も変わらない遊び場はいつも除雪されている

◀(ノルウェー)

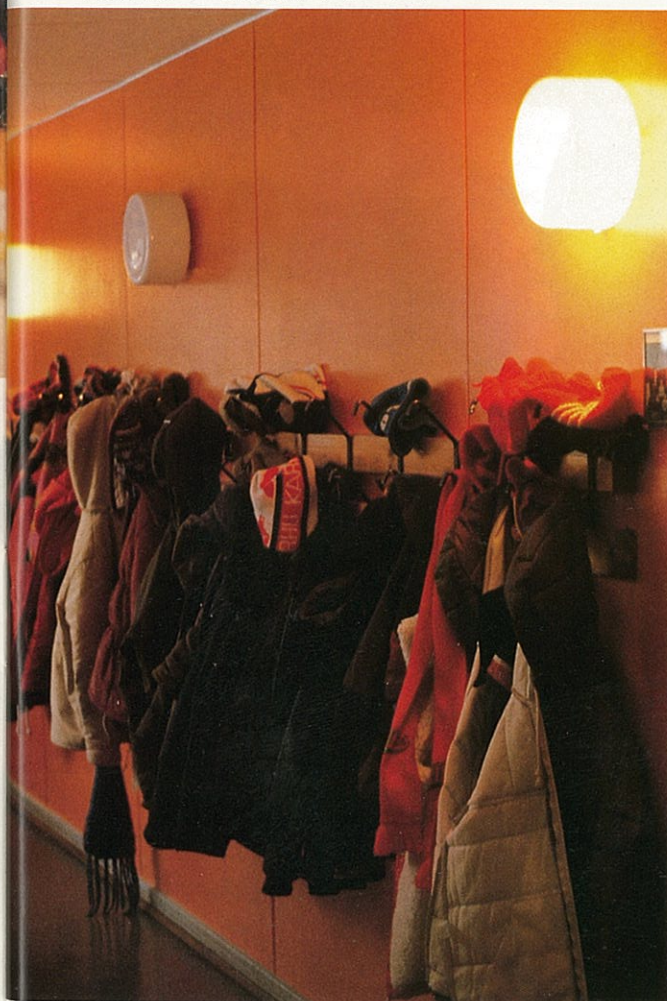


小学校の机は木製。教室の暖かいふん囲気を大切にしている▼(ソ連)▲(フィンランド)▼(カナダ)



▲冬を明るく過ごす工夫が随所に(スウェーデン)

学校も冬への備えが行き届いている



▲横幅をたっぷりとしたコートかけ(フィンランド)



▲暖房ヒーターを利用した小学校の乾燥だな(ノルウェー)



▶保育所や幼稚園にも必ず衣類乾燥機が……(フィンランド)



毎日の楽しみは どんなことだろう

北に住む人たちは、自然の中での野
外活動に意欲的です。

北国の四季の移り変わりは、それぞ
れに美しい自然を私たちに与えてくれ
ます。夏には入り込めない野や森に、神
様が、冬、白い橋を渡してくれた、とい
って、北欧の人たちは歩くスキーで
野や山を走り回ります。

カナダの池や川も、
冬は長いスケー
トリンクに変わり、
自然の贈り物とい
うわけて氷の上をエンジ
ョイしています。

また、夏の、太陽との触
れあいは、北国の人にとって
自然エネルギーの充電とい
うわけです。三カ月の夏休みの長
さは、そのまま夏の明るい太陽が
輝く期間です。

冬には、スキー、スケート、カーリ
ングと、たくさんさんの楽しみが戸外にあ
りますが、短い日照時間ですので、室内



での楽しみも大切です。友人を招いて
のパーティーも、冬の夜の楽しみの一
つですし、サウナに入つてひと汗流す裸
の付き合いも、北欧な
らではの喜
びです。

日光を求めて家族でピクニック



▲熱いコーヒーとケーキを積んで自然の中へ(スウェーデン)



▲ご近所を誘って戸外のランチタイム(ノルウェー)



▲短い夏をたっぷり楽しむための舞台づくり(カナダ)



▶待ち遠しかった緑の季節(ノルウェー)

健康は日なたポッコから
大切な日課だ



▲北欧では、太陽が帰ってくると春は間近か(ノルウェー)

▲ベランダは夏の憩いの部屋(ノルウェー)

●のプールはスケートリンクに早変わり

▲夏と冬で施設が変わる街の公園(スウェーデン)



▲ニュータウンのプールも冬はご覧のとおり(スウェーデン)



▶冬はジャンプ台に(フィンランド)



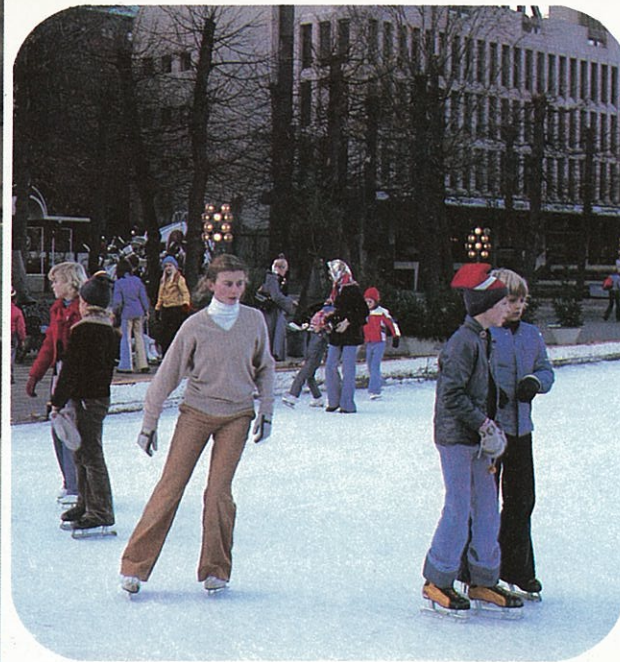
▲夏のうちに太陽をたっぷり浴びておく(カナダ)



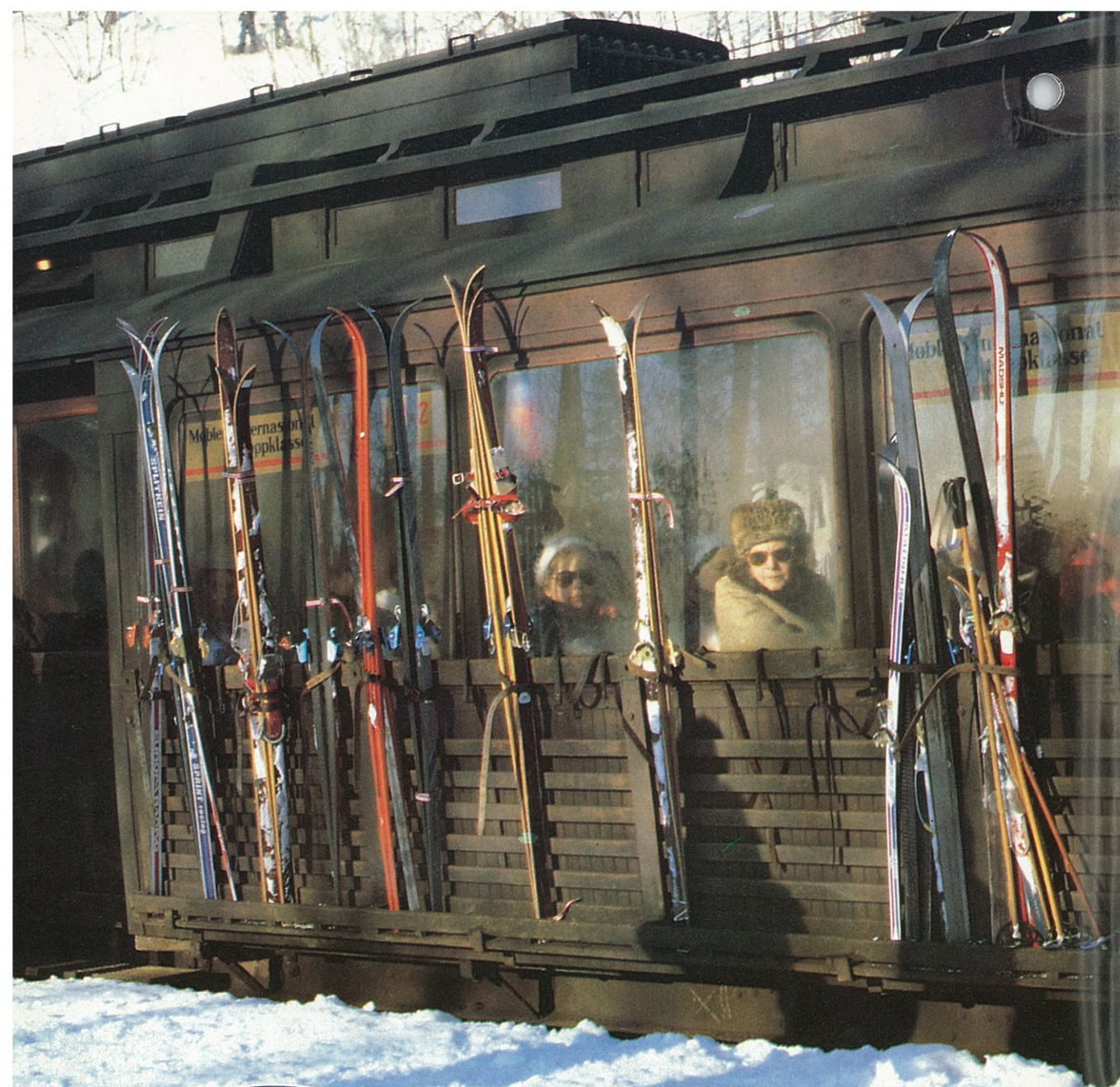
▶オスロの市民海水浴場(ノルウェー)

北の楽しみは数えきれない

▲学校が終わると、街の中のスケートリンク
(スウェーデン)
▼アイスホッケーは小学校の授業
(フィンランド)



▼日曜日には、子どものスキー大会が開かれる(ノルウェー)



▲ホルメンコーレン行きのスキー電車。週末は家族みんなで(ノルウェー)



▲雪の上の野外保育所、暖房設備はない(ノルウェー)
▼アラスカでは豪快な釣りが楽しめる(アメリカ)



北方圏構想と 明日の北海道

これまで、私たちは、本州との比較で物ごとを見がちでした。ここで視点を変え、地球を気候的に輪切りにして見ると、そこには、厳しい自然の中で楽しく豊かに生きようとする高い生活・文化を持つた人たちのいることがわかります。



ところで、私たちは、今なお、本州から到着した生活様式や、考えから抜け切っていません。北の風土に根をはった北海道独自の生活体系や、産業社会をつくる、といった面で、自覚と努力が足りなかったのではないのでしょうか。

北方圏諸国は、私たちと共通の課題を持った地域であり、生活や産業のあり方において教えられることがたくさんあります。また、共通の課題解決に、私たちがお手伝いできることも少なくないはず。だから、交流の輪を広げ、互いに知恵を出し合っていくというのが、「北方圏構想」です。

国際化時代のいま、広く北方圏諸国に目をひらき、北海道二世紀に向けてより発展をめざすことこそ、北海道に住む者たちの共通の願いと言えましょう。その基盤を固め、次の世代に申し送るのは、今日に生きる私たちの責任でもあります。



北方圏の暮らしと住まい グラフィック北方圏 第1集 (非売品)

昭和五十六年三月二十五日発行
発行 齋 北方圏センター
札幌市中央区北三条西七丁目
編集・発行人 佐藤直一
制作 博報堂札幌支社
印刷 山藤印刷

この出版にあたっては、本文取材、写真提供など、下記の方々にご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。(敬称略・順不同)

本文取材；伊藤隆一(道教大) 横川寛二(毎日新聞) 辻井達一(北大附属植物園)
写真提供；伊藤隆一(道教大) 辻井達一(北大附属植物園) 若浜五郎(北大低温研)
岡田宏明(北大) 岡田淳子(北大) 木下誠一(北大低温研) 阿部永(北大)
宮岡伯人(小樽商大) 鍛冶英介(さっぽろサケの会) 西田 博(網走西田呉服店)
中島祥一(北海道新聞) 和田秀正(北海道新聞) 島田康弘(毎日新聞) 日ソ友好文化会館



スウェーデンから新しい友だち。 トーモクをご紹介します。

Duni

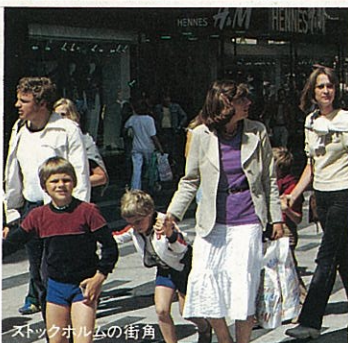
スウェーデン、ハルムスタッドに本拠を置くデュニプロ社は、紙およびプラスチック食器やテーブルカバーなど、食卓まわりの各種製品、また最近、著しくふえている医療関連の使い捨て製品をつくる世界屈指の企業です。ヨーロッパやアメリカでは、広くなじまれています。包装の総合メーカー、トーモクは、この度デュニプロ社と提携、その製品とノウハウのすべてを、日本へ輸入・販売することになりました。デュニセルテーブルカバーはその第1弾。インテリアのくにスウェーデンのとってもおしゃれな14色。近いうちに、きっとあなたのお目にとまります。



総輸入・発売元
株式会社 トーモク
デュニプロ部

本社 〒047 小樽市色内3-1-4 ☎0134-22-3171
本社・東京事務所 〒102 東京都千代田区丸の内2-2-2
丸の内三井ビル ☎03-213-6811

花開く北方圏構想



昭和五十五年秋の北海道とカナダ・アルバータ州との姉妹提携に続き、昭和五十六年春、五百六十万道民の大きな夢をのせて、千歳空港から国際便が飛び立ちました。

北方圏諸地域との交流を深め、その成果を新しい北海道づくりにいかにさう……と、北方圏構想が歩みはじめて十年。

いま、これが花開き、世界の北海道へ、また、二十一世紀の北海道へと、確かな一歩を踏み出しました。

(北海道)